

韓国における精神障害者地域生活支援の展開

—泰和キリスト教社会福祉館を中心に—

Development of the Community Support Systems for
People with Mental Illness in Republic of Korea

—Based on Taiwha Christian Social Community Center—

的場智子
MATOBA Tomoko

要旨

本稿では、泰和キリスト教社会福祉館の動きを中心に、韓国における精神障害者を対象とした地域生活支援事業の展開について示す。精神保健法制定以前の韓国では、国家による精神保健対策がなされておらず、多数の精神障害者は必要な治療やサービスを受けられず、一般社会と隔離された精神医療機関や精神療養施設に長期間収容されるか、あるいは地域内に隠れて疎外された生活を送っていた。1995年の精神保健法の制定により、地域精神保健への政策転換が始まり、精神障害者の社会復帰や地域精神保健サービスが拡充されはじめる。このような状況の中、国に先駆け泰和キリスト教社会福祉館は、1960年代末から、知的障害児やてんかん患者、精神科通院歴のある患者などに対し地域における精神健康プログラムを展開していた。1978年からは精神健康相談事業を開始し、精神科医やソーシャルワーカーが市民の相談に答えるとともに、様々な市民向け講座も開催した。そして1986年には韓国で最初の精神障害者社会復帰施設となる泰和ファウンテンハウスを開設する。ここではクラブハウスモデルを採用し、2003年にはICCDの認証も受け、現在ではアジア地区で唯一のクラブハウス国際訓練機関に選定されている。

キーワード：韓国 精神障害者 地域生活支援 クラブハウスモデル 社会福祉館

はじめに

本稿は、精神保健福祉法制定以前の韓国において、^{テフア}泰和キリスト教社会福祉館によって進められた精神健康問題に関する地域における支援プログラムの設立過程を明らかにすることに力を置きながら、韓国における精神障害者を対象とした地域生活支援事業の展開について示す^{1,2}。これまでも、韓国の社会事業成立に関する研究は楨などにより詳細な記述が行われてきた（楨1984、遠藤1989・1992・1994、朴2007）。しかし障害分野別の検討や、朝鮮戦争後の社会事業の展開に関するさらなる検討が求められている³。そこで本稿では、韓国で地域精神保健福祉事業の先駆けとなった泰和キリスト教社会福祉館の動きを中心に、精神保健法制定以前の韓国において、精神障害者の地域社会復帰施設が開設される歴史的背景と生活支援の実態について示すことを目的とする。泰和キリスト教社会福祉館は、宣教師経営の隣保館のなかでもっとも中心的役割を果たした、現存する最古の地域社会福祉館である。設立当初よりアメリカ人館長の元に韓国人女性らが一緒に活動をしており、泰和キリスト教社会福祉館の実践は、アメリカ流社会事業導入の契機となっていた⁴。泰和キリスト教社会福祉館の取り組みをみることで、韓国社会における民間社会事業が受けたアメリカの影響を明らかにすることにもつながる。

1. 精神科領域におけるソーシャルワーカー関与の始まり

建国以降の韓国では、朝鮮神経精神医学会（後の韓国神経精神医学会）が発足し、数少ない自国の精神科医らが医科大学に精神科を開設していった⁵。1950年の朝鮮戦争以降、アメリカで精神医学を学んだ者が帰国し、韓国内の精神医学体系は力動精神医学の影響を強く受けていた⁶。朝鮮戦争時の諸外国からの援助により、医療施設や社会福祉機関の相談サービスが拡張されるようになったが、なかでもアメリカ軍の病院で精神科ソーシャルワーカーとして勤務していたRalph W. Morganの活躍が韓国精神科医の臨床経験に影響を与え、韓国におけるソーシャルワーカーによる精神保健福祉分野への関与が本格化した⁷。そして、1958年ソウル市立児童相談所の設立により、児童問題に対して精神科医、ソーシャルワーカー、心理学者、法律家からなるチームとしての取り組みが試みられ、現在に至るまで活発な事業を続けている。1973年には、総合病院レベルの医療機関に対し、社会福祉士免許所持者の採用が法律で義務付けられ、大規模な医療機関では社会福祉士を採用することになり、多く

¹ 泰和キリスト教社会福祉館は1921年設立以来、福音伝播、教育、社会奉仕を目的に多様な社会福祉事業を展開してきた。時代状況により、その名称が1921～1933年は泰和女子館、1933～1953年は泰和社会館、1953～1980年は泰和キリスト教社会館、1980年以降現在まで泰和キリスト教社会福祉館と称している。本稿で「泰和」とのみ記している際は、それぞれの時代の呼称を指すものとする。

² 「泰和」とは“大きい平和 The great peace”という意味である。

³ 朴 貞蘭、2007年

⁴ 朴、前掲書

⁵ 藤本美智子、2009年

⁶ ベイ・ヨンジュン、2009年

⁷ 문인숙・양옥경、1991年

のソーシャルワーカーが精神科と連携して活動するようになった⁸。このように初期の精神健康問題に対するソーシャルワーカーの介入は、医療機関で関心を持ったことに始まる。その後、民間組織で最初に精神保健福祉領域に対して取り組んだのは、1960年代末の泰和キリスト教社会福祉館であった⁹。

2. 泰和の精神健康プログラムの始まり

(1) 知的障害児事業

泰和キリスト教社会福祉館は、精神疾患患者及び精神障害者の予防とリハビリ事業からなる精神健康プログラムを新たに挑戦する重要事業として認識し、1968年3月知的障害児事業をはじめとし、精神健康事業を開始した。当時泰和が知的障害児事業を始めたきっかけは、1968年2月初めて知的障害児父母協会が組織され、国内に少なくとも30万人に及ぶとされていた知的障害児をそのまま放置するわけにはいかないという社会運動に刺激され、知的障害をもつ児童が家庭と社会に適応できるようにすることを目的として、この事業を実験的に開始した。

表1 クラス別教育科目と特別活動¹⁰

クラス	教育科目（午前）	特別活動（午後）
真	国語、算数、体育、美術 (国民学校2-3学年レベル)	編み物、裁縫、料理、掃除
善	国語、算数、音楽、美術、体育 (国民学校1学年レベル)	工作、野外授業、見学
美	国語、算数、美術、体育	生活訓練、娯楽

知的障害児事業は当初6人で始まったが徐々に会員が増え、全ソウル市内から集まった学生は毎日100%の出席率であった。1学期の間は朝9時から12時半までだったが、親たちの希望で午後3時まで延長されるようになる。特に熱心な親たちの協力により、効果的なプログラムとして定着した。毎日お弁当を持参し、午前は40分ずつの個人指導を中心にした取り組みを実施。昼ご飯を一緒に食べ、残りの時間は美術・工作・歌・娯楽などに加え、手を洗うこと、歯を磨くことなどの生活指導も行った。広い運動場へ行って「ボールけり」や滑り台で遊んだりすることで、気が小さくて緊張しやすく、うまく遊べない彼らにとって非常にいい時間になっていたようである¹¹。希望者が1969年には20人、1970年には33人と増え続けたことにより、受講者の知能と学習能力に合わせ、真・善・美の3つのクラスに分け、それぞれのレベルに合わせた教育を実施した¹²。

⁸ 문인숙・양옥경, 前掲書

⁹ 韓国では1980年代初期まで、国家による精神保健対策がなされておらず、私宅や無認可施設においての精神障害者の収容が主であった。また社会的には体系的な精神保健政策が不在のまま、精神病院や療養施設の病床を確保するための政策が続いてきた（ベイ、2009）

¹⁰ 「1971年度上半期事業報告及び1971年度下半期事業計画」1971年7月

¹¹ 「泰和事業報告書」1969年

¹² 「薄弱児部報告」1971年3月

各クラスの学生数はクラブ活動の原則から、15人を越えないように構成し、教科内容は各クラスによって異なったが、基本的に生活指導、学習指導、情緒指導、宗教指導などからなり、日常生活に必要な基礎的な生活習慣を身につける指導と学習指導を優先とした。また、この事業の究極的な目的は、知的障害児の社会適応と参加に置かれていたため、卒業と共に職業訓練にもつながるように配慮した。

これと共に、教育方法論や内容もより科学的・体系的に変わり、知的障害児を単に教えるということにとどまらず、学生の教育発達状況と適応状態を個人記録簿に詳細に記録することで、各児童に対する個別的指導計画を立て、成長過程と教育進展状況を測定するなど、集団内での個別化を通じ、より専門的な接近を試みた。それだけでなく、週一回精神科医を招き、初期の面接時は精神科医の診断を受け、児童の教育計画に反映させ、月一回親を対象とした教養講座も実施した。そうして精神科医、ソーシャルワーカー、特殊教育教員が協力し、児童の教育指導だけでなく、その児童が原因となり起こりうる家庭問題まで解決できるようにした。

この事業は多くの知的障害児と親に好評で、児童対象のキャンプも実施された。1968年8月初めて2泊3日のキャンププログラムを実施した際には知的障害児とその親と一緒に参加したが、1971年からは児童だけで実施した。それ以来、知的障害児キャンプは毎年恒例のプログラムとして定着し、参加者も増えた。キャンプでは、児童たちがここで頼れるのは先生だけということを知り、先生の話をよく聞き、自分で責任を持ち、自分の身なりを整えるような生活訓練を実施したが、これは大成功であった¹³。知的障害児事業は1968年に始まり、1978年まで10年間続いた。1977年14歳以上の生徒のうち、12名を第一回卒業生として輩出する。卒業生のほとんどが特殊職業技術学校に進学し、自活するための訓練を受けた¹⁴。これは精神健康事業の発展と成長の基盤を作った事業であった。

(2) てんかん患者のための「バラの会」

知的障害児事業とはまた別に、当時は不治の病だとされていたてんかん患者のためのプログラムもこの頃始まった。このプログラムは、てんかん患者のリハビリ事業機関である「バラの会 (Rose Club)」と連帯する形で1970年に始まった¹⁵。ここでは、バラの会から紹介・委託されたてんかん患者約20人が週一回集まり、メンバーは泰和が開いている祈祷会に参加すると共に病気について話し合い、個別の相談も行われた。

1971年には相談会員が70人に増え、定期的に相談を受ける青年20人でバラの会の青年クラブ「バラクラブ」を組織した。彼らは月1、2回集まり、専門医の診断と相談を受けながら、患者同士で親交を結んだ。泰和社会館の「バラクラブ」は、持病であるてんかんが原因となって生じる様々な社会適応問題を解決し、劣等感を減らすことを目的としていた。そのため、信仰を中心とした多様なクラブ活動を通じ、社会適応能力とリハビリ意欲を向上し、治療のため長期的な薬の服用と正確な診察結果に基づき、病気の克服を目標とする様々なプログラムを実施した。このクラブで行われたプログラム

¹³ 「1971年度上半期事業報告及び1971年度下半期事業計画」1971年7月、24頁

¹⁴ 「泰和事業報告書」1977年、2頁

¹⁵ Taiwha Christian Social Center Activity Program, 1970, 5頁

は次のようなものであった¹⁶。

表2 バラクラブのプログラム内容とその割合

分野	内容	割合
宗教活動	礼拝、聖書研究、信仰に関する体験談	10%
心理的相談	闘病、社会適応に伴う問題点、治療法	10%
社会的活動	劣等感の減少、情緒活動、就職、社会適応法の模索	20%
趣味活動	手芸、養豚、農作物の栽培に関する講習、スポーツ	30%
娯楽活動	憂鬱から明朗な気分になるためのゲーム、歌、出会いなどのレクリエーション	30%

このプログラムは1972年まで続く。てんかん患者に与えた影響は大きく「疾患を悲観して3回も自殺しようとした青年がこのプログラムに参加して人生に対して意欲を持つことになり、社会適応に成功している」との報告も記されている¹⁷。このように、本プログラムは泰和の主要事業の一つとして定着したのであるが、それだけにとどまらず、そののちの精神衛生事業につながり精神疾患患者らの社会適応に大きく寄与することとなる。

3. 地域における精神衛生事業に関する取り組み

泰和の創立50周年を迎えた1971年は、様々な事業の拡大と既存の事業の質的改善を同時に試みた年であった。この時期には地域社会の多様なニーズが浮き彫りになりはじめた。当時館長であったキム・ソンシム¹⁸は、アメリカでソーシャルワークを学び、アメリカでの経験を泰和社会館に適用することで、多様な専門社会事業プログラムを開発・実行する一方、泰和社会館の事業主体を地域社会の住民とし、地域における福祉プログラムを拡大させる働きをした。こうすることにより、泰和は地域社会とより緊密な関係を結び、地域社会内の様々な階層の人々や集団を組織・統合するように努めた。

1971年泰和事業報告書によれば、精神衛生事業分野の中でも様々な問題をもつ個人と集団のための事業が新たに拡張・開発され、実施されたことが分かる。このとき行われた精神衛生事業としては、先に紹介したバラの会の他に、問題児の相談指導、更生保護の集まり、地域社会の精神健康会があった。問題児の相談指導は1971年上半期に泰和社会館の非会員と、当時の地域住民に開放していたグラウンドで遊んでいた子供たちを対象に相談指導を行ったもので、下半期には彼らを5～6名ずつのグループにして「問題児指導クラブ」を構成した。更生保護の集まりは法務部（法務省）の委嘱事業で、更生保護対象者たちを毎週木曜日1回訪問して相談指導した事業である¹⁹。

¹⁶ 「泰和事業報告書」1973年、27頁

¹⁷ 「泰和事業報告書」1973年、28頁

¹⁸ 1964年6月から1971年2月まで、そして1988年3月から1991年1月から泰和キリスト教社会福祉館の8代目、11代目館長として在職した。

¹⁹ 「泰和事業報告書」1971年

1970年事業計画における「地域社会の精神健康会」の特徴を具体的に見てみると、その内容はアメリカで行われていた精神疾患患者のためのデイケアや地域社会の精神保健プログラムを応用した活動で、シカゴのSt.Joshep病院とアメリカの隣保館Hull Houseの協力研究課題を見本としたものであった。これは精神健康上の問題を抱えて苦しんでいる個人、つまり精神科の退院を控えている患者や通院治療を受けている患者、または病院に行けない人々に、様々な集団活動を通じた治療的機会を提供し、地域社会への適応を助け、彼らの精神疾患の予防と再発防止を目的としたものであった。

泰和は「地域社会の精神健康会」を計画し、プログラム担当者の役割と資格要件、活動内容、メンバーのリクルートメント、メンバーの資格要件など細かく事業内容を構想し、準備作業として各病院・機関に事業計画の案内を送り、協力を依頼した。しかし、当時韓国の精神医療分野では、地域社会の精神健康プログラムは非常に珍しいものであったため、実際事業を始めるには多くの課題があった。なかでも最も大きな問題は、「地域社会の精神健康会」を担当できる職員とメンバーの確保であった。そして、このプログラムを計画・準備していたキム・ソンシム館長が1971年2月に館長から辞任することになり、事業を進めることがさらに難しくなった。結局この事業は1971年聖母病院精神科と3回、高麗病院と1回それぞれ接触をもっただけで、準備過程程度で終わってしまった²⁰。

精神健康問題をもつ人々のための「地域社会の精神健康会」事業は実現することはできなかったが、1972年には精神科での治療歴をもつ成人の集まり「マラソンクラブ (Marathon Club)」が作られた。このクラブは、精神科の治療を受けたことがある成人が定期的に集まり、社会に適応できるようにすることを目的としていた。しかし、当時はこのようなプログラムに対する社会的認識が足りず、実施1年目には対象者が2人しか集まらなかった²¹。人数不足のため集団活動ができず、そのため指導者は個別面接と親の面接、そして家庭訪問を実施した。また指導者は、泰和が持っている施設と人的資源とを会員の個別面接に活用することで、集団活動に代替するしかなかった。結局のところマラソンクラブはその年で終わってしまったが、その意図と方法論はそれ以降の精神健康相談事業に継承された。

1976年には浪人生を対象に、新たに精神健康のための事業を計画し進めることになった。これは、1960年代に泰和の全体登録会員の50~70%を占めていた中高生のクラブ活動が、1970年代に入って大きく縮小されたことにより新しく計画された事業であった。1970年代に入り、入試中心の教育政策で学生たちはクラブ活動をする精神的余裕がなくなったことに加え、1961年からの朴正熙政権の軍事独裁で緊迫した社会統制の雰囲気の中、中学校・高校では生徒たちの校外活動が厳しく規制されたことにその原因があった。1970年代の初めごろは、各中学、高校には平均25~30個のクラブ活動があったが、1976年にはそれが6個に減少している。それも実施回数が週1回から月1回、あるいは1学期1回行うというような状況で維持されていた²²。それさえも1978年からは高校でのクラブ活動は完全に廃止された²³。

²⁰ 「泰和相談事例集」1994年、17頁

²¹ 「泰和事業報告書」1972年、9頁

²² 「泰和事業報告書」1976年

²³ 「泰和事業報告書」1978年、1頁

また韓国では、韓国特有の価値観と雇用構造、教育制度などの複合的原因により、多くの学生が浪人の道を選ぶ傾向が見られた。希望する大学に不合格で浪人するというのは、本人だけでなく家庭と社会に大きな問題を与える。浪人生たちは、自信喪失、挫折、欲求不満、緊張感、自暴自棄などの精神健康上の問題と、家庭と社会からの疎外感・冷遇そして所属感の欠如などの問題を抱えていた。しかし、政府やマスコミなどは社会問題としての浪人生問題を言及するだけで、具体的な解決法を提示できずにいた。当時泰和キリスト教社会館があったソウル市鐘路地区には大学入試専門予備校が密集しており、浪人生がたくさん集まっていた。そのため、泰和は積極的に問題解決を試みようとして浪人生事業を始めたのである。

1976年4月6日から始まった浪人生事業は、泰和の建物の中に浪人生用の休憩室を作り、音楽を流し、茶菓子を提供する「冬の旅人」プログラムとしてスタートした。このプログラムがマスコミを通じ紹介されると、休憩室を訪れる浪人生が増え、一日平均300人以上の浪人生が出入りするようになった。自習室と読書室も浪人生のために午前9時から午後9時まで解放し、青少年のクラブ活動のため泰和が備えていた卓球室、グラウンド、ギターなどの施設や設備、備品も使えるようにした²⁴。

泰和キリスト教社会館の施設を利用するために多くの浪人生が社会館を出入りするようになるにつれ、不良学生も増え、些細な問題が絶えず起こるなど、問題が生じた。このような問題を解決するため、誰にでも開放していたプログラムを会員制に変更して実施することになった。1976年9月、休憩室と自習室を定期的に使う学生を中心にクラブが作られ、125人も参加するという大変な人気であった²⁵。1977年には会員300人が募集され、3人の職員が各クラスの担任となり、相談・生活指導及び会員間の交際を手伝うとともに、機関の政策を伝え、会員たちのニーズも聞き取り、報告した。各クラスの担任は会員の個人記録簿を持ち、相談過程を記録し、兵役の問題など専門家との相談が求められるときは専門家に依頼した²⁶。

こうしてプログラム利用者との個別的接近が可能となり、浪人生のための相談事業も活発に進んだ。なかでも兵役相談が最も多く、月平均約20人が兵役問題について相談を受けた。また、精神的な悩み、大学進学問題、価値観に関する問題でも月平均5～10人の相談を受けていた。相談は兵務庁の相談員、精神科医、そしてソーシャルワーカーが担当した。

また、泰和では浪人生のために著名人を招き、教養講座を開設した。さらにその親のための特別講義も開催した。1977年9月からはキリスト教や宗教に関心のある会員を対象に、朝の祈祷会を定期的に持ち、泰和キリスト教社会館の宗教活動にも参加できるようにした。彼らはこの会を「ハントゥトエ（一つの志の会）」と名づけた²⁷。この事業は1979年泰和がビルの建て替えのために鐘路での事業を暫定的に停止するまで続いたが、1980年代には鐘路地区の予備校の多くが郊外に移ることになり、浪人生も少なくなったためこの事業も終了した。

²⁴ 「泰和キリスト教社会館 職員会議録」1976年、4月6日

²⁵ 「泰和キリスト教社会館 職員会議録」1976年、9月15日

²⁶ 「泰和相談事例集」1994年、20頁

²⁷ 「泰和キリスト教社会館 職員会議録」1977年2月16日

4. 精神健康相談事業

精神健康相談事業が活発に動き始めたのは1978年であった。この年、泰和は社会教育部を新設し、現代社会を生きるうえで必要となる教育を企画、実施しようとした。この時期は産業化・都市化の進展、欧米文化の移入、成長だけを追及する経済政策、社会の急激な変化などが日常生活に影響を及ぼし、不満と不安が増え、人間の正常的な情緒生活と精神健康が脅かされるようになっていった。そのため現代人の精神健康問題が一個人の問題として解決できるものではなく、社会が共同で責任を持って解決すべき問題として認識され始めた。したがって、社会教育部は、成人の精神健康と精神健康問題の予防及び専門相談員の訓練を目標とし、本事業を進めることにした²⁸。

その最初の事業として、1978年4月10日から15日までを「精神健康増進週間」と定め、精神健康講座と演劇、文学と精神健康、音楽と精神健康、精神疾患患者が描いた絵の展示会を開催した。この事業は社会的に高く評価され、利用者たちの要求により毎週金曜日に精神健康講座と演劇を実施、1978年上半期に17回、下半期に18回実施された。そして、精神疾患患者が書いた絵の展示会もその年の10月に再び開かれることになった。精神健康講座と演劇に参加した人々は、より個別的な問題解決のためのサービスを求めるようになる。週に5日開設された相談室には、精神科医2人、臨床心理専門家1人、ソーシャルワーカー5人がボランティアで参加し相談に応じたが、初めの6ヶ月間相談を申し込んで定期的に相談を受けたのは全部で73人であった²⁹。

泰和で精神健康事業が活発に展開されるようになり、漢江聖心病院精神科は退院した患者1人の社会適応訓練を泰和に依頼してきた。当時韓国には精神障害者のリハビリのための社会福祉サービスが全くなく、泰和だけが多様な精神健康事業と共に、1968年から知的障害児の社会適応のためのリハビリプログラムを取り組んでいるという状況であった。泰和は漢江聖心病院の依頼を受け、退院した患者を知的障害児部に配置し、リハビリ訓練を行った。というのも、当時泰和はソウル市の都市再開発計画のため、社会館事業を縮小していた。精神健康事業としては、社会教育部の精神健康講座と精神健康相談室が運営されており、社会事業部の浪人生事業と知的障害児部の知的障害児社会リハビリプログラムが進められていたが、精神疾患患者のリハビリテーションを担当するには、知的障害児部が最も適しているという判断からであった。

このように活発に運営されていた精神健康事業は、1979年ソウル市の都市再開発計画による社会館事業の縮小とビル再建築のため、1978年末に一時中断された。精神健康事業は新しいビルが完成した後も続き、1980年代以降泰和キリスト教社会福祉館の主要事業の一つとして定着した。

1982年泰和ビルが新しく建て替えられ、中断していた社会館事業が再開され、精神健康事業も再び活発になった。1982年事業報告によれば、各事業部署の中、精神健康部では精神健康クリニック、精神健康水曜講座、40～50代主婦講座、自閉症児童の親講座を運営していたことが分かる³⁰。精神健康

²⁸ 「泰和相談事例集」1994年、20-23頁

²⁹ 「泰和事業報告書」1978年、1-7頁

³⁰ 1971年初めて事業分類に精神衛生事業という名称で、問題児の相談指導、バラの会のクラブ活動、更生保護の集まり、地域社会の精神健康会が分類され、1978年には社会教育部の主管で精神健康講座の開催と精神健康相談室が開

クリニック事業は、精神健康上の問題を持った個人が精神科医の診療と相談を受けられるようにした相談プログラムであった。また、精神健康水曜講座は、成人を対象に精神健康のための公開講座を行ったものである。40～50代主婦講座と自閉症児童の親講座は、泰和の月例講座プログラムで、それぞれ10月、11月に行われた公開講座であった。このように、1982年には新しい泰和キリスト教社会福祉館で、主に講座やゼミナールの形式で様々な教育プログラムが開発、実施されていた³¹。

1983年には、社会館の再建築のため中断していた精神健康相談室が再開される。再開された精神健康相談室は、ボランティアによる運営から、本格的に相談訓練を受けた専門相談員を配置し、より質の高い相談を実施することが可能となる。相談室は、社会適応に困難を感じている人々を対象とし、彼らが自分の問題を省察・理解して自分で問題を解決できるように助け、健康な社会構成員としてその役割を果たすようにすることを目標とし、その規模を拡張し続けながら運営されていた。

精神健康相談室は1978年6月開設されて以来、ビル建築の理由で約4年間の空白期間があったが、15年間で約1700人の相談を行った。相談を通じ、精神健康問題だけでなく、家庭問題、人間関係問題など、多様な個人的な問題を持った相談者たちの問題解決能力を向上させることに力を入れてきた。また、精神健康講座、社会劇は精神健康問題の予防、啓蒙及び、教育も視野に入れて行われていた³²。

泰和の精神健康事業は1968年の知的障害児事業を皮切りに、泰和の代表的な事業となっていった。特に精神健康相談室は、精神疾患予防事業として社会からも好評を得、現代社会が要求する福祉事業の一つとして認識されていった。

5. クラブハウスプログラムの導入—泰和ファウンテンハウス

これまで示したような泰和の精神健康事業は、それまで韓国に見られなかった新たなプログラムの開発につながった。それは1986年から始まった「泰和ファウンテンハウス」である。1980年代初旬、政府も精神健康分野の社会事業に関心を持ち、民間の社会福祉法人が精神疾患患者の収容及び診療施設を建てる場合、行政的な支援を行うという方針を表明した。この時期に泰和も精神疾患患者のための施設を作ろうとしており、キム・ジョンジン³³を通じてニューヨークの精神疾患患者社会復帰利用施設Fountain Houseプログラム（クラブハウス）を知り、1986年4月7日、クラブハウス方式を用いた泰和ファウンテンハウスが開館した³⁴。

泰和ファウンテンハウスの基本精神は、「人間は誰でも意味のある集団の成員として属し、生産的

設、精神健康事業が活発に展開していた。1982年初めて精神健康問題だけを取り扱う部署として、「精神健康部」が新設された。

³¹ 「泰和相談事例集」1994年

³² 「泰和相談事例集」1994年

³³ 高麗大学病院の精神科ソーシャルワーカーで、アメリカ国務省が主催した“Council of International Program for Social Workers and Youth Workers”に参加し、ニューヨークのファウンテンハウスを訪問、その教育プログラムを受けて帰国する。1986年から1990年まで泰和ファウンテンハウスのプログラム責任者で、その後は精神健康相談室、本館の福祉部長として勤務していた。

³⁴ 「泰和事業報告書」1986年

表3 泰和ファウンテンハウスの活動内容^{35 36}

プログラム	実施時期	内容
就業前プログラム	部署活動	年中 調理部、事務部、環境管理部、運営部、音楽部
	趣味・教育活動	年中 絵画、おしゃべりグループ、一般会計クラブ、英会話、翻訳、ユリの会、討論会、
	夕方活動	週1回 毎週火曜日夕食会
	週末活動	月1回 映画鑑賞、夜夕会、登山、博物館見学、など外部活動
	特別活動	年中 一日カフェ、バザー、発表会、
就業プログラム	職業訓練	年中 皮革工芸部、就業情報紹介
	過渡的雇用訓練	年中 時間制の過渡的雇用斡旋
	副業活動	年中 リサイクルショップ運営
	連雨会	月1回 就業メンバーの集まり

な仕事を通じて求められ、やり遂げようとする基本的な欲求があり、深刻な精神疾患を持っていた人でも潜在的な生産性を持ち、仕事を通じて地域社会に再統合されうる」という信念に基づいている。このプログラムは精神科病歴のある成人が家庭や社会に復帰し、人間らしく生きられるよう支援することにその目的がある。したがって、クラブハウスでは強制的にプログラムが進められるのではなく、参加者（メンバー）たちの自発的な参加と自律的な運営によって行われる。メンバーは精神保健分野のソーシャルワーカー7人の支援を受けながら様々な業務を遂行し、責任を持って自分の適応障害を減らし、就業訓練、過渡的雇用を経て独立就職をすることで、地域社会の中で活動できるように泰和ファウンテンハウスは支援している。

過渡的雇用とは、地域社会の中で就労先が提供され、メンバーは雇用主から直接給与をもらい、3ヶ月～6ヶ月の一定の期間に働くというクラブハウス独特の就業訓練課程である。1986年から1994年9月まで活動した529人の会員のうち、約33%である173人の会員が過渡的雇用訓練に参加した。泰和ファウンテンハウスが行っていたクラブハウスは、韓国で初めて試みる精神障害者の社会復帰プログラムであったため、最初は社会の理解がなかなか得られなかった。しかし次第に社会的に反響も出始め、初年度は登録会員が71人であったのが1988年には74人、1989年には108人、1990年に126人となった。また家族会員や後援者も増えていった³⁷。1990年4月4日の開設4周年を記念した祝賀行事とバザーには、地域住民や社会福祉関係者も多く集まり、そのことは韓国日報にも記事として掲載された³⁸。

他にもメンバーの家族の集まりがあり、メンバーや家族の相談も行い、メンバーの社会復帰のため互いに努力する雰囲気を作っている。そしてこの事業のために後援者を募集し、ひろく社会から経済的支援を受けているだけでなく、精神健康に対する啓蒙も図る。

精神健康相談室と泰和ファウンテンハウスは、精神健康の問題を持った人々の問題解決能力を向上

³⁵ 「泰和事業報告書」1986年

³⁶ 「泰和キリスト教社会福祉館 精神健康事業 泰和ファウンテンハウス」パンフレット 1988年5月

³⁷ 「泰和事業報告書」1986年～1990年

³⁸ 「이웃 (隣人)」37号、1990(6)、3頁

させ、彼らが社会に再適応できるように支援するという共同の目標の下で相互協力してきた。精神健康相談室では、精神科病歴のある個人が集団を通じた社会適応訓練を必要とする際、泰和ファウンテンハウスに依頼し、泰和ファウンテンハウスのメンバーが個別的関心を必要とする場合、相談室に依頼するなど、サービスの相互協力体系が形成されていた。

むすびにかえて—今後の課題

1995年に制定された「精神保健法」により、韓国ではそれまでの施設収容中心の政策は地域での治療とリハビリテーションを重視する方向に転換し、地域において精神保健福祉サービスを提供する施設が作られるようになる。その以前から、泰和キリスト教社会福祉館では精神健康関連の地域支援事業を展開していた。泰和キリスト教社会福祉館は、1921年の設立時と比べて規模と形式は大きく変化してきたが、創立当時から追求した3大事業理念「女性教育」「福音伝道」「社会事業」の精神は常にその内容に反映されている。泰和ファウンテンハウスは1995年にはICCD（The International Center for Clubhouse Development：クラブハウス開発国際センター）からクラブハウス認定を受け、現在ではアジア地区で唯一のクラブハウス国際訓練機関に選定されている。2003年からは3週間訓練を定期的実施し、アジアのクラブハウススタッフやメンバーが当地を訪れている。

これらの取り組みが、韓国社会福祉において歴史的にどのように位置づくのか、さらに民間社会事業に与えたアメリカ社会福祉の影響についても、本稿では考察できていない。また、それぞれの事業についても、より詳細な点を検討していく必要もあるだろう。

付記 本研究は平成22～24年度科学研究費補助金（基礎研究（B）、（課題番号22330170）、研究代表者小澤温）の一部として行われた。

参考文献

【日本語文献】

- ベイ・ヨンジュン、「韓国の動向——精神保健法制定後15年間の地域精神保健への歩み」精神障害とリハビリテーション 13（1）、35-41、2009
- 趙香花・野中猛、「韓国における精神保健医療福祉の歴史と現状」、日本社会精神医学会雑誌、21、31-40、2012
- 遠藤興一、「植民地支配期の朝鮮社会事業－1」明治学院論叢（449）、107-178、1989
- 「植民地支配期の朝鮮社会事業－2」明治学院論叢（499）、1-60、1992
- 「植民地支配期の朝鮮社会事業－3」明治学院論叢（534）、97-150、1994
- 「植民地支配期の朝鮮社会事業－4」明治学院論叢（542）、1-61、1994
- 「植民地支配期の朝鮮社会事業－5」明治学院論叢（546）、23-87、1994
- 藤本美智子、「韓国」、新福尚隆・浅井邦彦編『世界の精神保健医療—現状理解と今後の展望』へるす出版、138-145、2009
- 楨英弘、「近代朝鮮社会事業史研究—京城における方面委員制度の歴史的展開」、緑蔭書房、1984
- 朴貞蘭、「韓国社会事業史—成立と展開」、ミネルヴァ書房、2007

【韓国語文献】

문인숙·양옥경, 「정신장애와 사회사업」, 일신사, 1991

(ムン・インスック, ヤン・オッキョン 「精神障害と社会事業」, イルシン社, ソウル, 1991)

이덕주, 「태화기독교사회복지관의역사 (1921-1993)」, 태화기독교사회복지관, 1993

(イ・ドクジュ, 「泰和キリスト教社会福祉館の歴史 (1921-1993)」, 泰和キリスト教社会福祉館, 1993)

1960-1983년도태화운영이사회 회의록 (1960-1983年度 泰和運営理事会会議録)

1960-1993년도태화 사업보고서 (1960-1993年 度泰和事業報告書)

태화상담 사례집 (「泰和相談事例集」, 泰和キリスト教社会福祉館, 1994年)

Development of the Community Support Systems for
People with Mental Illness in Republic of Korea
—Based on Taiwha Christian Social Community Center—

MATOBA Tomoko

Abstract

This study demonstrates the development of community support systems for people with mental illness in the Republic of Korea, focusing on the Taiwha Christian Social Community Center, which worked constructively despite the absence of a law related to the mental health and welfare of people with mental illness. The center conducted mental health programs, such as those for children with mental retardation and patients with epilepsy; furthermore, these patients attended a psychiatric clinic within the center. In 1986, the Taiwha Fountain House, a facility that helps people with mental illness to return to the society, was established for the first time in Korea. The House is inspired by the American clubhouse model of psychosocial rehabilitation, which provides support to individuals with mental illness. In Asia, the Taiwha Fountain House is the only institution that has been approved by The International Center for Clubhouse Development (ICCD).

Keywords: people with mental illness, community support system, Korea, clubhouse model, social community center